

北海道酪農の先覚者黒沢西蔵先生は現下の酪農危機に対処す
る道を明らかにし、農民の奮起を促すため全道各地を講演行
脚されている。先生の講演は頗る示唆に富み、到る所て聴衆
に大きな感銘を与えているが、ここにその概要をお伝えする。

酪農危機の教えるもの

北海道開発審議会長
酪農学園園長
黒沢西蔵

昨今またまた酪農危機という言葉がさけ
ばれて来た。生産と消費のアンバランスが
原因で、危機突破大会というものが方々に
開かれている。これは無理のないことであ
るが、政府も、メーカー（販売業者を含め
て）、生産者ともに真剣に、その根源に遡
って抜本塞源の道を講じ、徹底的打開の策
を講せぬかぎり、その安定はできない。直
言せば三者の心からなる総反省である。

第一には従来とり来った歴代政府の政策
のあやまりである。従来政府はとかくの批
評を受けながらも、依然生産増強一本槍で
あつた。消費方面に対しては、殆んど全く
無策で、何等有効な手を打たない。これが
そもそもアンバランスの根本原因である。
故に政府が生産増強の策を執るなら、同時
に消費増進をも併せ行わなければならない
。即ち下流の淡濃疎通を計つて、上流か
ら徐々に水を流さなければならぬのである
が、この下流工作を怠つて、一方的に増産
を行うから氾濫を来すのは当然である。赤

城前農相が初めて消費面の政策に手を付け
たが、極くささやかなものであるからその
効果を現わすまでにはならない。

第二に業者の反省すべき点は、牛乳に余
刺を産ずれば受乳を拒み、甚しきに至つて
は工場閉鎖をさへ行いかねない。反対に牛
乳がホンの僅か不足すると、忽ち猛烈なる
争奪戦を行い、農村の平和を攪乱して敢て
省みない。現に一昨年（の如き）何等値上げの
必要なきに拘らず、眼前の、僅か一、二パ
ーセントの不足を補わんために大争奪戦を
演じたので、大局に通せぬ農民が争うて牛
を入れ、乳牛はうなぎ上りに値上り増産を
行つたのが反動的に遂に現下の余刺乳を招
来するに至つたのである。業者のこの買い
あさり、買いたたきとは何等反省のあと
なく、過去数十年間繰り返されて来た。

業者に対するもう一つの註文は、乳製品
を国民的食品にまで育てあげることであ
る。これは政府の消費増進政策とタイアッ
プして行われるべきものであるが、現在の

ように、一部階層の贅沢品にとどまるなら
ば、牛乳、乳製品業の前途は高が知れたも
のである。業者は宜敷く工夫研究大馬力を
かけ、この関所を打ち破つて牛乳の消費大
衆食品化の大道を開きなければならぬ。

第三は、生産者に対する要望である。生
産者が多年の努力によつて、今日の酪農を
築くに至つた功績は偉大なものであるが、
酪農民ごとごとくが酪農のもつ真意義を確
実に把握しているか、どうか。ささか疑
わしい。中には隣りが牛を飼つたから俺も
飼う、隣が牛で儲けたから俺も儲けてやろ
うというように、附和雷同的に酪農に入つ
た人々も、随分有り得ると思う。それは高
乳価の時はいいが、一朝不況に陥り、低乳
価に見舞われると、忽ち抵抗力を失つて、
悲鳴をあげる人が案外に多いのでわかる。
もつともこれはひとり生産者のみを責める
わけにはいかない。よき指導者の無かつた
ことにも原因があるし、延いては政府の政

策にまで遡及せねばならぬ問題であるが、
儲かるのも、損するのでも生産者のやり方
何が大きく響くのであるから不況時は勿
論、好況時代にあつても油断することなく、
生産費の低下に研究努力しなければなら
ぬ。牛は草で飼うようにと、飼料作物や輪
作のやり方をいくらお説教しても電話一本
ハガキ一枚で間に合う購入飼料にたよろ
とするのが一般の通弊で、当然の酬いとし
て生産費が高くなり、牛その物の健康にも
種々な障害を与える。もう一つは酪農家の
家庭における牛乳消費量をもつともつと殖
やすことである。現在日本の酪農民は約三
十五万戸、家族人口二百十万人を抱いてい
る。仮りに一日一人一合の牛乳を飲むとせ
ば一カ年に七十六万石を消費するではない
か、今問題となつて居る余刺牛乳七八十
石は直ちに片づくのである。而かも魚肉に
代わる脂肪、蛋白の給源とするなら、栄養、
経済双つながら大に利得しえられるが、実
際は新鮮で栄養豊かな牛乳をさつぱり飲ま

① 地力維持に必要な有機質肥料 —堆厩肥、緑肥—

既耕地	550万町歩	現在
開拓地	150万町歩	20年後
合計	700万町歩	〃

人口1億 当り反別	7畝歩	1人7畝 で養う
--------------	-----	-------------

② 700万町歩の地力維持 —必要有機質肥料—

700万町歩×3000貫 (反当最少限300貫とみて)
21,000,000,000貫 (210億貫)

③ 地力維持に必要な家畜単位

1家畜単位の肥	2000貫
700万町歩に 必要な堆厩肥	210億貫
210億貫 生産必要家畜数	210億貫÷2000貫 1050万家畜単位

ず、これを安く売って量、質ともに劣る魚肉等に高いお金を払っている酪農家がかなり多いのである。この矛盾を改めるなら、ただそれだけでも一〇%内外の余剰乳を解消することができないではないか。原則的には酪農民自らが牛乳食品化を先ず実行してこそ延いて全国民の食品化が順序であろうし、牛乳の品質改善も自から達せられるものである。

又この酪農危機の克服ということは、以上三者の失宜、矛盾を払拭して、生産消費のバランスのとれる線において、良き物を安く売つても結構儲かる酪農、儲かる乳業を建設することであらねばならぬ。

由来消費階層の希いは至極簡単である。品費の同じ品物なら、値段の高い方をやめて、安い方を用いる。ただこの一言につき

る。国産品が高くて外国品の安い場合は、何も我慢して国産品を買う必要がない。安い外国品をどしどし入れるというにきまつて

又国際関係からいつても、こちらから出してやるものはなるべく関税を安くしてもらつて多く出してやろう。あちらからはいつて来るものには高い関税をかけてぎゅうぎゅう制限しようでは、あまり身勝手である。お互い裸貿易でも十分戦える態勢をつくるのが何よりも大切である。

以上是一片の抽象論のようであるが、詳しく言えば一々事実をもつて裏づけることができる。その一、二を言うならば、政府が余剰牛乳の処分法として学童給食の措置

をとつたが、これは大変よいことであるが、その量が少ない。もつと予算が多くして、常時に行うようにすべきである。現在脱脂粉乳その他外国よりの輸入量は牛乳に換算すると実に一カ年百八十万石を越えている。これは総生産量の二五パーセントに当るのである。北海道の三十二年

度生産は百五十五万石であるから相当な数量である。政府は一方に生産増強を強行しながら、消費は自然増に委ねているが、消費は景

気、不景気が敏感に影響し、計画通りに行くものではない。学童給食以外、官庁、会社、工場等における集団飲用に乗り出して行つて、もつと強く働きかくべきである。昨年一年間に市場へ出た牛乳はざつと三百万石、人口に割り当てると一日一勺足らず、バターは一年間に五人がかりで一百度たべるに過ぎぬ。こんなことでは国民保健も食生活改善もあつたものではない。仮りに日本人が一日一合宛牛乳を飲むとすれば、年間に三千三百二十一万石、更にバター、チーズ、製菓用煉粉乳等の原

④ 将来における家畜飼養数想定 (日本)

乳牛	500万頭	現在約	60万頭
役肉牛	300万頭	現在約	250万頭
豚	1,000万頭	現在約	100万頭
鶏	10,000万羽	現在約	100万頭
その他	50万頭		(馬 80万頭)
合計	10.50万頭	家畜単位	590万頭

⑦ 日本人1人当りの消費量

飲用 (1年間)	3,295千石 ÷ 9,100万人
1日当り	36.2合
	1勺弱 10日で1合弱
乳製品他間	10日で1合弱
バター	5日間で1合弱

⑧ 32年度輸入量

脱脂乳	5,822万封度
牛乳換算	1,805,000石万
チーズ	139万封度
牛乳換算	42,000石
合計	1,874,000石

全 国 生産乳量 (32年度)	7,260,000石
輸入量と対	25%強
参考 北海道生産乳量 (32年度)	155万石

⑨ 酪農家飲用による余剰牛乳解決

酪農家戸数	35万戸
家族数 1戸6人として	210万人
1人1日飲用量	1合
年間用量	365合
全年酪農家用	76万石
現在余剰	60万石

⑤ 保健上必要な乳量 (最少限) と乳牛数

牛乳 1人1日	1合	365合 × 9,100万人	3,320万石
乳製品 1人1日	1合	365合 × 9,100万人	3,320万石
合計			6,640万石

6,640万石 生産搾乳牛	1頭の搾乳量 6,640万石 ÷ 20石	332万頭
搾乳牛を頭を保有に	500~600万頭の乳牛が必要	

⑥ 32年度牛乳生産と利用状況

総生産量	726万石
自家用 (酪農家)	726千石
市 乳	3,295千石
加 工 用	3,239千石

料を含めて一人が牛乳一合相当量を用いるとすれば、約三千三百二十一万石、両方で六千六百万石が必要となる。昨年の総生産乳量は七百二十六万石であるから約九倍の増産を必要とするのである。これを空想といつてはいけない。日本の水産業は諸般の情勢から判じて、もはや大きな発展が望めない。将来魚は貧乏人は食えない時がくるかも知れぬ。今後の脂肪給源、蛋白給源

はいや応なく酪農、畜産に頼るほかない。これは農政の根本問題であるが、国土の地力維持増進という面から考えれば更に重大である。耕地約五百五十万町歩、今後利用しうべき土地傾斜地を入れて百五十万町歩、合計七百万町歩で、これだけの土地で、近く一億に達するであろう大人口を養つていかなければならぬ。化学肥料のみに依つては地力維持さえ出来ないのみならず、化

バター1封度当

年 月	117.30 円
32. 5	
33. 5	82.17 円 (英国着値 90 円)

参考 米国バター1封度 200円内外

デンマークの乳価

(牛乳升当り)

年 月	市乳用	原料用	脱脂乳
32. 5	28.15 円	26.78 円	9.77 円
33. 5	28.05 円	23.05 円	11.73 円

牛乳生産量の趨勢(附バター)

年 度	生 産 量	前年比	バ タ ー 一 産		前年比	市 乳		前年比
			石	%		石	%	
昭和16年	2,079,591	101.6	S 16 1,306,435	114.4	S 198年 7,340,977	130.4		
21	796,618	79.6	295,765	73.9	3,536,525	74.0		
22	856,451	107.5	333,478	112.7	3,308,762	93.6		
23	1,089,810	127.3	345,356	103.6	3,644,773	110.2		
24	1,624,668	149.1	554,427	160.5	3,887,085	106.6		
25	1,959,036	120.6	735,903	132.7	5,399,027	138.9		
26	2,334,396	119.2	949,710	129.1	6,004,406	111.2		
27	3,115,524	133.5	1,499,333	157.9	8,848,003	147.4		
28	3,796,370	121.9	1,824,501	124.9	10,285,429	116.2		
29	4,952,408	130.5	2,219,818	118.5	15,083,719	146.7		
30	5,333,199	107.7	2,579,313	116.2	16,085,010	106.6		
31	6,152,698	155.4	2,891,440	112.1	17,138,429	106.5		
32	7,262,083	118.0	3,295,670	114.0	21,298,998	124.3		
33 (推定)	8,460,327	116.5	3,855,934	117.0	26,000,000	122.1		

学肥料専用の弊害は世界の公論である。有機質肥料(堆厩肥緑肥)と化学肥料の併用に依つて両者ともに最大肥効を發揮することも農業科学が厳肅にこれを命じている。どうしても、家畜による有機質肥料の施与に俟たなければならぬ。この計算から将来の乳牛数を五百万頭とし、役肉用牛三百万頭、外に豚一千万頭、鶏一億羽は是非いふと思う。夢のような計数といふかもしれぬ、又二十年かかるか、三十年かかるかわ

からないが、将来の大人人口をおもひ、これを養う食糧を思えば只目先きのことのみにあくせくしては行れない。従つて政府の生産増強策も、これを裏づける消費増進策も三十年、五十年の後を考え、地力維持増進と一億国民の健康とを深く考慮し、堅忍、持久、一歩でも後退しては行けない。メーカーに対する要望は加工面、販売面におけるむだを省き、よいものを安く売れるように努力すべきである。

(註) 20年迄及27以降は農林統計
21~26年 畜産提要

私の酪農学園では牛乳一合五円に売っているが、生徒は十円玉をもつて来て二合宛飲んでいく。一般市価を五円に切下げることは勿論不可能であろうが、少し売つて楽に暮そうという消極的、退嬰的方針を改めて、将来六千万石の大増産をも物の見事にさばきつてやろうという積極的方針に切りかえるならおのずから安価多売の道が開けると思う。

生産者の苦しい立場にあることは私は誰よりも十分知つてゐるつもりである。しかし努力の余地はなお多々あることを疑わぬ。私は酪農家を訪ねて、第一に目をつけるのは尿溜である。乳牛はそこそこに見ても、裏に廻つて尿溜は丹念に見る。私の持論であるが酪農で儲かるのは家畜の糞尿位のものである。これを巧みに合理的に利用すれば飼料や農作物が二倍にも三倍にも殖えるが、これを粗末に扱えば、いつまでもたつても貧農の域を脱し得ない。

牛乳コストの高つく原因は、購入飼料に頼ること、大切な糞尿を粗末にすることに大体要約される。

かく論じて来て、私は酪農危機の突破服は、政府、メーカー、生産者三者の心からなる総反省と、その具体的方法をそれぞれの分野において工夫研究し、堅く強き信念を以て果敢なる実行以外にないと思う。今日の危機こそ、むしろ転禍為福の好機会であることを信ずるものである。

酪農家必携の良書案内：
飼料作物栽培
の手引

改訂版(第四版)発売!

昭和二十九年三月初版発行以来皆様の御好評をいただき、その後第二、第三版と改訂増補して出版して参りましたが、この程更に大幅に内容を充実し、現代酪農家必携の書として発刊発売致して居りますので御利用下さい。

売価 送料共 百 円

草地改良
著眼と事例

新版発売!

熱心なる全国酪農家よりの強い要望に応え各種利用目的に應ずる草地は如何になすべきかを實際事例に基き解説した新版書「草地改良・著眼と事例」を発売致して居りますので、「飼料作物栽培の手引」の姉妹篇として御愛読を御すすめ致します。

売価 送料共 百 円